

「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を育成する 臨床心理学教育

－「臨床心理学」「カウンセリング基礎演習」「教職実践演習」「実践セミナー」の授業例－

近藤孝司*・加藤哲文*・田中圭介*・宮崎球一*

(平成29年9月4日受付；平成29年11月6日受理)

要 旨

本稿の目的は、「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を育てるために、「臨床心理学」教育においてどのような教育実践が行われているのかを報告するものである。

本稿では、臨床心理学の基礎知識と理論、技術の習得を主眼に置く授業として、「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」を取り上げ、この授業で行っている「実践力」を高める具体的な取り組みを報告した。次に、臨床心理学の視点から学級運営や心理教育に主眼を置く授業として、「教職実践演習」と「実践セミナー」を取り上げ、授業例を報告した。これらの教育実践で共通する点として、臨床心理学の理論、知識、技術を将来の教職実践に活用できること、演習形式の授業であること、事例検討を重視していることなどが挙げられる。

KEY WORDS

21st Century's Ability 21世紀を生き抜くための能力, education of Clinical Psychology 臨床心理学教育, practical ability 実践力

1 はじめに

今日の日本を取り巻く環境は著しく変化している。情報技術の急速な発展により、世界中の様々な知識を気軽に収集することができ、世界の人々と容易にコミュニケーションが取れるようになる「情報化社会」が高度化してきた。それに伴い、従来の知識に頼るのではなく、新しい知識の創生が求められる社会（知識基盤社会）であることが求められる。同時に文化、宗教、風土、人種、民族など多様性に満ちた社会に適応することが必要とされるようになってきている（多文化共生社会）。今後も劇的に変化するであろう社会情勢に生きていくために、「21世紀を生き抜くための能力」が提案された。「21世紀を生き抜くための能力」は、幅広い視点に立って、未来を創り出していく「生きる力」であり、「基礎力」、「思考力」、「実践力」の3つの要素で構成されている。これまで、臨床心理学コースにおける「21世紀を生き抜くための能力」を育成するための議論を続け、「思考力」¹⁾と「実践力」²⁾における授業実践の基本的指針を明らかにしてきた。本稿は、これまでの議論の成果を基にした臨床心理学コースにおける授業実践の例を報告するものである。

2 「臨床心理学」教育における「実践力」の養成と評価基準

臨床心理学は、「主として心理・行動面の障害の治療・援助、およびこれらの障害の予防、さらには人々の心理・行動面のより健全な向上を図ることを目指す心理学の一専門分野」³⁾と定義されるように、様々な不適応からの回復、不適応に陥らないための予防的介入、質の高い生活を営むことを目的とした開発的アプローチなどを目的に、精神医学や学習心理学、実験心理学など多くの周辺学問の研究知見を実践へと活用とすることを重視する「実践」の学問である。「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」と関連する部分が多いと考えられ、臨床心理学の知識と理論を活用することで、教育実践の中で、子どもの他者を尊重する精神の養成、共感性・道徳観の発達、コミュニケーション・スキルの成長、自己洞察の促進などに資する「実践力」の育成につながるものと考えられる。

まず、本学の臨床心理学教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」をどのように育成するか、『報告書5』の付表1「各学校段階で養成することが期待される実践力と共有価値」の中で提示されている「中学

*臨床・健康教育学系

校」における下位カテゴリーを基準に、「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」を構成要素である「自律的活動能力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」ごとに評価基準を作成した(表1)²⁾。

以下、表1の評価基準を実際の授業の中でどのように取り入れられ、実践されているか、臨床心理学コースの固有科目を例に、授業礼を報告する。しかし1つの授業で、表1の評価基準のすべてを満たすことは現実的に不可能であるため、複数の授業を通して、これらの評価基準を満たす方が望ましい。そこで臨床心理学コースの固有科目の中で、臨床心理学に特化した授業である「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」、教員養成に特化した授業である「教職実践演習」と「実践セミナー」ごとに評価基準を新たに設定し、それに基づく実践例を報告する。

表1 「21世紀を生き抜くための能力」の「実践力」の要素および下位項目と評価基準

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準
自律的 活動力	自己	<p>【能力】 自己理解 自己調整 意志決定 主体性 キャリア設計</p> <p>【生活習慣】【健康・体力】 ・健康やストレス関連のさまざまな理論に基づき、児童生徒が健康的な生活習慣の必要性を理解し習得するとともに、心身の健康状態に応じた臨床心理学領域からの適切な対応が行える。</p> <p>【計画実行力】 ・自己の発達や自己コントロールなどに関する理論や方法論の理解に基づき、児童生徒が自己探求と自己実現に向けた目標の実現に向けて、計画立案、実行および評価を行い、必要に応じた計画の見直しができる。</p> <p>【価値】 節制 自尊・自信 個性伸長 不撓不屈 向上心</p> <p>・児童生徒がさまざまな情報を元に、セルフ・アイデンティティ確立の1つとして、将来の方向性を創造的に考え探究することを促進できる。</p> <p>【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】 ・自己の発達理論に基づき、児童生徒が自身の能力や個性、強さなどを理解するとともに、強さや苦しさ受容し成長を促す対応ができる。</p> <p>【自律】【自己決定】【選択能力】 ・児童生徒がさまざまな情報を元に、主体的に考え、意志と責任を認識できるようにかかわれる。</p> <p>・児童生徒のセルフ・アイデンティティの確立を促進できる。</p> <p>・児童生徒が選択の基準となる自身の価値観を確立し、多様な選択肢から意志と責任に基づき主体的な行動がとれるようにかかわることができる。</p>
	他者	<p>【能力・価値】 他者理解 表現力 礼儀 思いやり</p> <p>【礼儀・マナー】【思いやり】【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】 ・対人関係やコミュニケーション理論の理解とコミュニケーション・スキルを高める。</p> <p>・自身の意見や思い、感情を表出するとともに、他者の思いや感情を相互に交流できる。</p> <p>・児童生徒の個別性に応じた対応ができる。</p> <p>・時と場(TPO)に合わせた行動と逸脱行動および背景要因を理解し、学習者の発達段階に応じた心理教育実践が行える。</p>
人間関係 形成力	集団	<p>【能力・価値】 共同・協働 役割と責任 合意形成</p> <p>・学校内外のさまざまなチームに関する理論を理解し、チーム・メンバーとして主体的に活動に参画する。</p> <p>・課題への協働した活動を通し、自他ともの役割を認識し責任の共有を行える。</p>
	社会	<p>【能力・価値】 規範意識 社会連帯 文化尊重 公德心 権利・義務 勤労・就業力・ 起業家精神 正義・公正 寛容</p> <p>【規範意識】【権利・義務】 ・さまざまな場や関係におけるルールやマナーと道徳観の発達理論の理解に基づき、自他の権利と義務を理解し、よりよい社会づくりや社会参加が行える。</p> <p>【勤労・創造】 ・自己理解に基づき、社会人としての協働の意義を理解し、働くことによる社会貢献と自己実現をしながら新しい社会づくりに貢献できるような心理教育が行える。</p> <p>・平等と公平および差別や偏見が生じる社会文化的影響を理解し、人権の尊重と共同した組織および地域、社会の実現に取り組める。</p> <p>・地域社会のさまざまな歴史や伝統文化、活動に参加するとともに、多文化共生マインドと受容行動を高める。</p>
社会参画 力	命	<p>【能力・価値】 防災・安全 生命尊厳 自他の生命の尊重</p> <p>【尊厳】 ・成長や老いること、障害や死生学など「生きること」に関する理解を深め、生命尊厳の在り方に関する自身の価値観を確立する。</p> <p>【防災・安全】 ・さまざまな危機的状態とそれぞれにおける身体的・心理的・社会的反応を理解し、対応や支援法を習得し実践できる。</p> <p>・安心感のある社会のためのさまざまな活動を理解し、多面的な健康状態の維持・向上への心理教育ができる。</p>

3 「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」における「実践力」の養成と評価基準

「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」は、臨床心理学コースの必修授業であり、臨床心理学の知識と理論、技法を体系的に学ぶ授業である。「臨床心理学」は様々な理論や精神障害を説明し、臨床心理学の基礎となる知識の習得を目指し、「カウンセリング基礎演習」は演習形式でカウンセリングスキルとカウンセリングマインドを習得することを目的としている。この2つの授業における「実践力」の評価基準を表2に示す²⁾。

(近藤 孝司)

3.1 「臨床心理学」における実践例

「臨床心理学」の授業では、臨床心理学における様々な理論と実践に関する知識を養うことを目的としている。悩みや問題を抱える他者の援助方法を学び、学生が特に教育分野において効果的な支援が行えるようになることを目指す。講義の前半では、臨床心理学の歴史、臨床心理査定法、精神病理学に関する知識などを扱う。後半では「臨床心理面接の理論と実際」として、クライアント中心療法、応用行動分析、認知行動療法などの援助法に関する背景理論と実践法を扱う。ここでは、特に学生の実践力の育成に強く関連する項目として、「応用行動分析」の回で行った授業内容を紹介する。

表2 「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準（「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」）

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準	「臨床心理学」と「カウンセリング基礎演習」における評価基準	
自律的活動力	自己	【能力】 自己理解、自己調整、意志決定、主体性、キャリア設計 【価値】 節制、自尊・自信、個性伸長、不撓不屈、向上心	【生活習慣】 【健康・体力】 【計画実行力】 【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】 【自律】 【自己決定】 【選択能力】	① 児童生徒の不適応を臨床心理学・精神医学の観点から理解し、援助の見立てを立てることができる。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習) ② 様々な理論を用いて児童生徒のパーソナリティや価値観、人間関係などの個性を理解することができる。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習) ③ 児童生徒の適応的な行動を増やすことを目的とした環境づくりを計画し、実行できるようになる。 (臨床心理学) ④ 児童生徒が内省し、自己理解を深めることが可能な関わり方ができる。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習) ⑤ 開発的カウンセリングの観点から、児童生徒の主体性を促し、自己実現・キャリア設計へと方向づけられる。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習)
	他者	【能力・価値】 他者理解、表現力、礼儀、思いやり	【礼儀・マナー】 【思いやり】 【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】	⑥ 学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付け、他者尊重の模範となっている。 (カウンセリング基礎演習)
人間関係形成力	【能力・価値】 共同・協働、役割と責任、合意形成	⑦ 児童生徒の抱える問題を、家庭、学級、学校、地域からアセスメントし、他職種との連携を通じて対応ができる。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習)		
社会参画力	社会	【能力・価値】 規範意識、社会連帯、文化尊重公徳心、権利・義務、勤労・就業力・起業家精神、正義・公正、寛容	【規範意識】 【権利・義務】 【勤労・創造】	⑧ 児童生徒が社会の中で自己主張と他者尊重の姿勢を発揮するために、模範として学生がカウンセリングマインドとカウンセリングスキルを身に付けている。 (カウンセリング基礎演習) ⑨ 時代の変化から臨床心理学の歴史を理解し、時代に合った人間観をもっている。 (臨床心理学・カウンセリング基礎演習)
	命	【能力・価値】 防災・安全、生命尊厳、自他の生命の尊重	【尊厳】 【防災・安全】	⑩ 精神疾患に関する正確な知識を養い、障害への偏見や差別を知ること、学生が他者を尊重し公平に関わる態度を児童生徒に示すことができる。 (臨床心理学)

応用行動分析（Applied Behavior Analysis）では、学習理論に基づいて行動と環境の関連性を分析し、行動の予測と制御という観点から問題の解決を図る。特に、特別支援教育をはじめとした学校現場における子どもの支援に効果が示されており、近年注目されている。応用行動分析を理解し実践できることは、学生が教育現場で働く上で、教員として子どもの教育や支援を効果的に行えるだけでなく、同じ知識を有している他職種（例えばスクールカウンセラー）との連携をスムーズにすることにもつながる。実践力の育成のために、本授業では最終的に学生が自身の行動を分析し、行動変容を狙いとした環境調整の計画を立てるエクササイズを行わせることとした。セルフ・コントロールを行うために自分自身の環境を調整する力は、他者の援助を実践するための基盤になる。学生が自分自身の行動を理解し、行動変容の計画を立てて実践し、結果に基づいて適宜修正するという一連のエクササイズを行うことで、教育現場において児童生徒の適応的な行動を増やすための環境づくりを行える力を高めることができると考えられる。表3に、「応用行動分析」の回の授業内容を示した。

表3 「応用行動分析」の回の授業の流れ

理論	(1) 応用行動分析の基礎的な学習として、学習理論に関する講義を行う。 (2) (1)で学習した理論をもとに、身近な例を用いて行動分析的に現象を記述するエクササイズを行う。
実践	(3) 教員が用意した教育現場で起こりうる事例を提示し、行動分析によって問題がどのように維持されているのかを考え、適応的な代替行動を検討する。
体験的 エクササイズ	(4) 学生自身が「これから継続して行なっていきたい行動」を取り上げ、その行動を維持させるための環境調整を計画する。 (5) グループごとにそれぞれの計画を発表し、問題点や改善点について話し合う。 (6) (5)で受けたコメントを取り入れて修正した計画を発表し、フィードバックをもらう。

(1)～(3)は講義形式で行い、オペラント条件づけを中心とした学習理論とその応用に関する知識を養うことを狙いとした。授業では、身近な例をあげて、行動分析的に捉えるとどのように行動を理解することができるのかを記述する反復練習を行った。(4)(5)(6)では、学生に「これから継続して行いたい行動」を具体的に挙げてもらい（テーマとしては「ダイエット」「勉強」「読書」などが含まれていた）、先行刺激・行動・結果事象の枠組みで、どのように環境を調整すると行動が維持できるか、計画を立てさせた。また、グループ内の学生には、それぞれの学生が立てた計画に対してコメントをしてもらった。以上のやり取りをもとに、さらに環境調整に必要な点を考え、最終的な行動分析計画としてまとめさせた。計画立案に際しては、「頑張る」「しっかりやる」といった抽象的な言葉を使うことを禁止し、具体的にどのように環境を変えることで行動が持続するのかを考える」という点を強調した。

本授業の成果として、まず学生それぞれが自身の行動を変容するための手続きをまとめた計画を作成できたことが挙げられる。リアクションペーパーでは、「行動分析で問題を説明しようとする」と直感や曖昧な表現が使えないから、具体的に自分が何をすることを考えることができる」「問題を人のせいではなく、環境と子どもの相互作用の結果だと考えることが重要だと思った」といった、応用行動分析で重要視している基本的な考え方が身につけていることが確認された。今後学生が児童生徒の教育や支援に携わった際に、問題を「環境と行動の相互作用の結果」と捉え、環境に働きかけていくための基礎的な力が養われたと考えられる。また、授業の進め方として、他の受講生の計画に対しては建設的なコメントを伝え、自身の計画に対して受けたコメントを元に計画を修正するなど、学生が共同して問題に取り組む時間をつくった。このことは、教育現場において教員や他職種と連携しながら児童生徒の指導や支援に取り組む「実践力」の向上に寄与するだろう。

(宮崎 球一)

3. 2 「カウンセリング基礎演習」における実践例

「カウンセリング基礎演習」は、カウンセリング心理学の理論とスキルの教育を念頭に置いた、実践型の授業である。カウンセリングの考えや面接技術に関する演習と議論を通して、学校場面や相談場面、日常生活に応用できる技術と知識の習得が目標である。

カウンセリング基礎演習では、以下の内容を段階的に学ぶことを目指す（表4）。

- 1) カウンセリングの基本的知識の習得
- 2) 自己理解の促進
- 3) カウンセリングスキルの習得
- 4) 実践場面の応用

5) カウンセリングの観点からの人間理解

まず、「1) カウンセリングの基本的知識の習得」である。ここではカウンセリングの歴史的背景や人間観について説明する。特に、カウンセリングの始まりに、アメリカにおける貧困と非行予防のために行われた職業ガイダンスが大きな影響をもつこと、つまり教育の要素がカウンセリングに含まれている点を強調する。そして、カウンセリングが医療、教育、福祉など様々な領域で使われ、個人から集団まで適用可能であること、治療から開発まで様々な目的に活用可能であることを伝え、そのなかでも教育領域におけるカウンセリングの活用について詳しく説明する。もうひとつ強調すべき点として、カウンセラーに求められる態度（共感的理解、無条件の肯定的関心、自己一致）と、カウンセリングの人間観（クライアント中心、内省能力の重視、自己実現傾向）について解説し、今後の演習でこれらを意識して取り組むようにと教示する。

「2) 自己理解の促進」では、心理検査を用いて自分自身を客観的に理解するワークを行う。これには心理検査の演習も兼ねているが、自分自身の考え方や人間関係の特徴を理解しておくことが、カウンセリングの演習のなかで自分の課題点に気づきやすくなるのではと考えてのことである。例えば、引っ込み思案な学生である場合、事前にその性格特徴を意識しておくことで、カウンセリングの演習のなかで感情の反映をためらったり、聞きたいことを質問できなかったりと自身の問題点に気づきやすくなる。使用する心理検査は、特に人間関係のパターンを明確化できるように、東大式エゴグラムや文章完成法を用いる。また自己理解を促すことは、自分自身を知る機会にもなり、学生にとって貴重な機会になる。

「3) カウンセリングスキルの習得」は、カウンセリング基礎演習の核となる部分である。世界で標準的に用いられているカウンセラー養成プログラムである「マイクロカウンセリング」を活用して、カウンセリングスキルを習得する。マイクロカウンセリングは、カウンセリングに必要なスキルを細部に分解し、ピラミッドの頂点を目指す形で基本的な部分から一段ずつ習得していくプログラムである。この演習では、そのすべてを習得することは現実的ではないため、カウンセリングの基礎となる「基本的関わり技法」に限定している。

まず授業の4回目（表3）では「非言語的態度」を扱う。話しやすい雰囲気についてディスカッションし、カウンセリングを行う場面のイメージを深めていく。具体的には環境、クライアント、カウンセラーの次元ごとに、話しやすさに関する要素を明確にしていく。環境要因では、静かでリラックスできる部屋、防音仕様、面接中に誰も入ってこないことがない、観葉植物がある、適度な温度、着座の形態などが、クライアント側の要因では、苦悩の程度、知的水準、発達水準、内省能力、解決へのニーズなどが、カウンセラー側の要因では、姿勢、視線、ジェスチャー、服装、声の調子、社会的属性、面接の目的などが考えられる。

5回目では「はげまし」を練習する。「うんうん」「なるほど」などの日常的に使うあいづちは、間をもたせる役割のほかに、クライアントの話を促す役割もあり、その意味から「はげまし」と名付けられている。はげましを続けることで、クライアントは聞いてもらえている感覚を感じ、ラポール形成にもつながる。ここで生徒はクライアント役とカウンセラー役に分かれ、クライアント役は自己紹介と最近取り組んでいることについて3分間話し、カウンセラー役はひたすら「はげまし」を使って傾聴する。その際、4回目で話し合った、話しやすい姿勢を意識する。ロールプレイ後は改善点などについてディスカッションし、役割を交代してもう一度ロールプレイをする。ロールプレイの効果は、体感的に学習するだけでなく、役割を交代することで相手の様子を観察学習し、さらにディスカッションすることで省察することができる、効率的な学習法である。この演習では、ロールプレイを積極的に取り入れている。

6回目では「質問技法」を練習する。開かれた質問と閉ざされた質問の2つを紹介し、どちらか一方で質問し続けられたら、どのようなカウンセリングになるかをロールプレイで体験する。どちらにも長所と短所があり、クライアントの様子に応じて両者を使い分けることができるように練習していく。また相手が答えやすい質問の工夫についても説明する。

表4 カウンセリング基礎演習の内容

回	内容
1	オリエンテーション
2	カウンセリングの人間観と基本的態度
3	自己理解のワーク
4	
5	基本的かかわり技法（非言語的態度）
6	基本的傾聴の連鎖(1) はげまし
7	基本的傾聴の連鎖(2) 質問技法
8	基本的傾聴の連鎖(3) 感情の反映
9	基本的傾聴の連鎖(4) フィードバックと自己開示
10	介入のための積極技法
11	10分間の長時間のロールプレイと話し合い
12	実際の臨床実践
13	DVD視聴とディスカッション
14	
15	

7回目では「感情の反映」を練習する。カウンセリングにおいて感情は大きな意味をもつ。そのクライアントの気持ちに共感し受容したことをクライアントに示す感情の反映は、ラポール形成も含め、カウンセリングの重要なプロセスである。日常生活では感情の反映を使用する機会が少なく、控えめな生徒の場合は恥ずかしさが先行して、これまでのスキルより難易度が上がる。そこで、まず嬉しかったこと、悲しかったことなどのエピソードを書いてもらい、それに対する感情の反映の応答についてグループで話し合う。そして適切な応答をロールプレイで実践し、感情の反映に慣れることを目指した。はじめ抵抗がみられたが、時間が経つにつれて、慣れていく様子が観察された。

8回目は「フィードバック」と「自己開示」を練習する。フィードバックは、「よく頑張ったね」や「それでいいと思うよ」などカウンセラーの感じたことや考えたことをクライアントに伝えることである。クライアントが自身の新しい側面に気づけるよう②支援する技法であり、クライアントの自己評価の修正に役立つものである。また効果的なフィードバックのために、「具体的」、「非評価的」、「肯定的側面にスポットを置く」ことを意識してロールプレイするように指導する。例えばフィードバックのロールプレイの課題は以下のようなものである。

クライアント役は、「理不尽に感じたこと」を3分間話し、カウンセラー役は上記の要点を考えながら、基本的関わり技法で傾聴し、フィードバックする。その後、フィードバックされたクライアント役の感想を聞き、改善点を探るための議論をする。

そして自己開示は、カウンセラーが自身の体験を話し、その体験を自身の糧にしてもらうことである。しかし自己開示は、内容によって自慢話、的外れの話、カウンセラーの自己卑下などになってしまう可能性があり、「内容が適切かどうか」、「ただ言いたいだけじゃないか」などに注意する必要がある。自己開示は、通常のカウンセリング訓練ではあまり扱われないが、児童生徒との距離が近い教員の場合、身につけるべきスキルと考え、ここで扱う。そのロールプレイの練習課題を以下に挙げる。

クライアント役は、「やりたいと考えていること」「最近困っていること」のどちらかについて3分間話し、カウンセラー役は基本的関わり技法で傾聴し、折をみて自分の経験を短く自己開示する。その後、議論をする。

9回目では積極技法を学ぶが、紹介に留める。これらの技法は多くの練習を必要とし、ある程度の実践経験がないと効果的な習得とならないためである。具体的には、探索、矛盾提示（対決）、情報提供、リフレーミング、ミラクル・クエスチョン、例外の発見などを紹介する。

10回目は、まとめの回として10分間のロールプレイを行う。これまで学んできたスキルを使って、「最近間の悩み」をテーマにロールプレイを行う。10分という時間に、はじめ多くの学生は戸惑うが、実際に行くと短いながらもカウンセリングのプロセスが展開され、カウンセラーの心境を模擬的に経験することができ、意外と時間を短く感じる。思わぬ効果として、ロールプレイから自身の自己洞察につながったと報告する学生が何名か現れることもある。また時間のある限り何回も繰り返すが、発展形として「悩みをもった児童生徒が担任の先生に相談する」といった設定を行い、実践的なロールプレイを行う。

「4)実践場面の応用」では、臨床現場ではどのようなかたちでカウンセリングを用いているのかを解説する。特にスクールカウンセラーを中心に説明していく。将来、教員を目指す学生たちが最も接触するであろう臨床心理職がスクールカウンセラーであり、彼らの業務や専門性を理解することで、将来、実践現場での教育相談に関する問題に直面したとき、効果的に対応できるようになることが目的である。学部生にとってイメージしにくいものであるため、視聴覚教材を使って説明する。

「5)カウンセリングの観点からの人間理解」は、これまでの講義のまとめである。カウンセリングに関する映画の視聴とディスカッションを通して、臨床心理学の観点からの人間理解を深める。ディスカッションでは、クライアントである主人公の心情の理解、カウンセラーによる介入の効果、クライアントの成長、もし自分がカウンセラーだったらどうするかなどを時間かけて議論し、レポートにまとめていく。

以上、5つのプロセスを通し、学生のカウンセリングスキルを高めていく。授業の成果は、受講者による授業アンケートの結果に反映されている。「この授業の目標や目的は、明確でしたか」、「興味深い内容でしたか」、「総合的に満足していますか」などの項目では、学部平均と同等またはそれ以上であり、学生たちにとって得るものの大きい授業であった。

(近藤 孝司)

4 「教職実践演習」と「実践セミナー」における「実践力」の養成と評価基準

実践セミナー『臨床心理学』及び教職実践演習（臨床心理学）は、実践的理解や指導力に優れた教員を養成するために、学生の基礎学習と実践を結び合わせるための重要科目として位置付けられる。そこで、加藤他（2017）では、両科目の評価基準が検討された（表5）。特に、実践セミナー『臨床心理学』では、子どもへの理解や関わり、支援、連携についての学びを深めることに重点を置いた評価基準が提案された。一方で、教職実践演習（臨床心理学）では、児童生徒やクラスの実態に応じて、ストレス・マネジメント、アンダー・マネジメント、社会的スキル訓練、感受性訓練など、その実習校に必要な心理教育を考え、実践することに重点を置いた評価基準が提案された。詳しくは、加藤他（2017）を参考にされたい。以下では、平成28年度の実践セミナー『臨床心理学』及び教職実践演習（臨床心理学）の授業内容を詳しく紹介する。

（田中 圭介）

4. 1 「実践セミナー」における実践例

「実践セミナー『臨床心理学』」の授業は、学部3年生を対象として開講されており、修士課程臨床心理学コースに開設されている「実践場面分析演習『臨床心理』」と合同で行われている。

この授業では、教育現場で生じる児童生徒の心身の発達上の問題に対して、教育現場でどのように対応していくかという課題について考究することを目的としている。具体的には、児童生徒の長期欠席、不登校、いじめ、生育環境の問題、非行、発達障害をはじめとする障害のある状態などで生ずる児童生徒のさまざまな心理的、行動的な困難さについてとりあげる。そして、このような状況にある児童生徒の支援について、教育現場での実践的な観点から質疑応答、討論を経て検討する。

授業は、学部3年生が初等教育実習の経験をもとに実習中に関わった児童生徒の事例を取り上げ、そこで観察し体験した状況を報告する回（1時間の授業で2人の発表が行われる）と、教職経験のある大学院生による教育現場での上述した課題などを報告する回から構成されている。

このような報告の後に、事例の理解を深めるための質疑応答、大学院生を含めて10人程度のグループに分かれて討論が行われる。討論の内容は、事例の対象となった児童生徒の実態を共通理解した後に、学校全体としての支援体制の実際、学級担任教師を中心とする支援の実際、スクールカウンセラーや外部の専門機関・専門職との連携の実際、保護者との連携の実際などを取り上げ、課題や今後の支援のあり方などについてである。これらの討論を経てグループ毎に討論の内容を発表し、その結果をもとに授業担当教員が講評を行う。

次に平成28年度の実践例を紹介する。学生Aの発表は、事前にパワーポイントによって作成された資料に基づいて次のような内容の報告を行った。すなわち、実習先の学校および学級における目標、学級全体の様子、観察や実践の対象となった児童の特徴（この報告では、学習面での遅れがないが授業態度や対人関係面で困難性があることが取り上げられていた）、学級担任が通常行っている支援の状況、発表者が教育実習生として関わった時の報告、発表者がとらえた問題点や検討してもらいたい点などであった。これらを20分間で報告した後に質疑応答が行われた。そして、あらかじめ設定されていたグループに別れ30分間のグループ討論を行った。この間、発表者は各グループを巡回し、そこで出された質問等に答えていた。その後、討論の内容等についてグループ毎に発表が行われた。各グループには、現職教員あるいは教員経験者の大学院生が分散して配置されており、討論時に教職経験のある大学院生が適宜助言等を行っている状況が観察された。グループ討論の後にグループ毎に討論の概要に関する発表が行われた。発表の内容は、観察や実践の対象となった児童の支援の仕方について、学級全体でどのような指導や支援を行うか、実際の担任教師が行っている指導と実習生として取り組んだ学生の指導はどのように違っているかなどについての討論の結果が報告された。そして、最後に担当教員から、①学級の状況の把握の仕方、②対象となる児童の特製や特徴の把握の仕方、③対象となる児童を含めた学級全体での指導の仕方、④対象となる児童の指導や支援の仕方（合理的配慮）等の観点から各発表の講評を行った。

この授業の成果としては、①学部3年生が本授業の直前に体験した教育実習の結果を踏まえて、事例を発表することで、教育現場で生じる児童生徒の心身の発達上の問題に対して、教育現場でどのように対応していくかという課題について考究することが可能となったこと、②まとめる際の観点をあらかじめ設定してあるので、すべての授業参加者が発表者の内容を共有しやすいこと、③グループ討論で、学部の学生が教職経験者を含む大学院生と意見を交換できること、④グループ毎の発表から、事例（対象となる児童の理解と、学級での指導や支援のあり方）について多面的に考究できるといった点があげられた。本授業に関する受講学生のアンケート結果では、学級での指導や学級経営に関する知識や情報、指導方法等に関する満足度は、5段階評定で平均4.7と高い評価が得られた。

表5 「臨床心理学」教育における「実践力」の評価基準（「教職実践演習」と「実践セミナー」）

実践力	能力・価値	「臨床心理学」における「実践力」の評価基準	「教職実践演習」と「実践セミナー」における評価基準
自律的活動力	【能力】 自己理解, 自己調整, 意志決定, 主体性, キャリア設計 【価値】 節制, 自尊・自信, 個性伸長, 不撓不屈, 向上心	【生活習慣】 【健康・体力】 【計画実行力】 【自己理解・自己評価・自己受容・個性伸長】 【自律】 【自己決定】 【選択能力】	<ul style="list-style-type: none"> 事例検討を通して, 児童生徒のメンタルヘルスを日常生活の実態から理解しようとする。 (実践セミナー) 模擬授業を通して, 児童生徒の主体性を促す工夫を, 心理学的観点から考えることができる。 (教職実践演習) 学生自らが児童生徒の個性を尊重することができる。 (実践セミナー, 教職実践演習) 事例検討を通して, 児童生徒の能力や個性, 強さなどを理解することに努め, 自尊心や成長を促すかわり方について議論することができる。 (実践セミナー) 模擬授業を通して, アイデンティティや価値観に働きかける心理教育を実践することができる。 (教職実践演習) 事例検討を通して, 課題を抱えた児童生徒の今後の発達や望ましい方向性について考えることができる。 (実践セミナー)
人間関係形成力	【能力・価値】 他者理解, 表現力, 礼儀, 思いやり	【礼儀・マナー】 【思いやり】 【コミュニケーション・共感・他者理解・表現力】	<ul style="list-style-type: none"> 事例検討を通して, 児童生徒の逸脱行動とその背景要因について考えることができる。 (実践セミナー) 学生自らが児童生徒の模範となるような礼儀や思いやり, コミュニケーションを取ることができる。 (実践セミナー, 教職実践演習) 模擬授業を通して, 児童生徒に適応的行動を指導したり, 児童生徒のコミュニケーション・スキルや思いやりに働きかけることができる。 (教職実践演習)
	【能力・価値】 共同・協働, 役割と責任, 合意形成		<ul style="list-style-type: none"> 学生自らが児童生徒や家族, 教職員, 専門家と連携を取ることの重要性を理解することができる。 (実践セミナー, 教職実践演習) 事例検討を通して, 児童生徒の行動についても, 集団のダイナミクスから理解することができる。 (実践セミナー)
社会参画力	【能力・価値】 規範意識, 社会連帯, 文化尊重, 公德心, 権利・義務, 勤労・就業力・起業家精神, 正義・公正, 寛容	【規範意識】 【権利・義務】 【勤労・創造】	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の模範となる規範意識を持つことができる。 (実践セミナー, 教職実践演習) 模擬授業を通して, 児童生徒に対してルールやマナーを指導することができる。 (教職実践演習) 学生自らが児童生徒の模範となることを自覚し, 教育活動に取り組むことができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)
	【能力・価値】 防災・安全, 生命尊厳, 自他の生命の尊重	【尊厳】 【防災・安全】	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の社会的アイデンティティや人権理解に働きかけることができる。 (実践セミナー, 教職実践演習)

本授業では、「教育現場で生じる児童生徒の心身の発達上の問題に対して、教育現場でどのように対応していくか」という課題について考究することを目的とし、さらに知識や理論のみでは得られない実際の課題に迫るために、できるだけ現実的なテーマや内容を取り上げた。その上で、教育実習での体験の発表や、教職経験のある大学院生をまじえたグループ討論を設定することにより、多様で多面的な実践力の向上に資すると考えられる。

また、大学院生と合同で授業を実施することで、現職教員の大学院生や、相談室等で実際に児童生徒や保護者に対するカウンセリングや心理的支援を行っている大学院生から得られる高度な質問や助言などは、学部生の教育実習の

体験をより深化させていると考えられた。

(加藤 哲文)

4. 2 「教職実践演習」における実践例

「教職実践演習（臨床心理学）」の授業では、学生が将来、学校現場において臨床心理学的知識を活かして授業実践を行うための実践的な指導力を養うことを目的としている。この授業では、学生は自らの実習経験を踏まえた上で、実習校に必要となる臨床心理学的な教育課題を定め、保健や道徳、総合学習などでの実施を想定した指導案の作成及び模擬授業を行う。特に、平成28年度の10月に実施した授業では、ストレス・マネジメント、アンガー・マネジメント、社会的スキル訓練、感受性訓練など、心理教育的観点からの授業実践に焦点を当てて行った。

心理教育は、様々な心理的なスキルを児童生徒に育成することに焦点を当てた臨床心理学的アプローチであり、児童生徒のメンタルヘルスの促進、不登校やいじめの予防、対人関係の促進など、児童生徒の健全な心の成長を促すための実践的アプローチとして効果を挙げている。よって、心理教育の観点からの授業実践を行うことは、21世紀を生き抜くための「実践力」を児童生徒に育成するための関わり方や指導力を身につける機会となるだろう。表6に、「教職実践演習（臨床心理学）」の授業の概要を示す。

表6 教職実践演習（臨床心理学）の授業の概要

事前指導 と準備	<ul style="list-style-type: none"> ・学部3年次の教育実習での経験を振り返り、担当学級の児童生徒の様子から、必要と思われる臨床心理学的な教育課題（例えば、他者への思いやりなど）を定める。 ・発表を担当する授業回までに、自ら定めた教育課題に合った心理教育を調べ、指導案（例えば、温かい声かけなど）を作成する。 ・対象となる児童生徒の発達段階に合わせて授業を計画する。
模擬授業	<ul style="list-style-type: none"> ・一人25-30分程度を持ち時間として、指導案を用いて模擬授業を実施する。模擬授業は、発表者以外の受講生とコース教員を対象児童として行う。 ・模擬授業後、発表者、受講生、及びコース教員で、振り返りと討論を行う。
講評	<ul style="list-style-type: none"> ・コース教員は、上越教育大学スタンダードを踏まえ、授業構成や目的の明確さ、話し方や板書、表情等の表現、発達段階に合った授業計画、学級集団への対応などの観点から評価を行い、指導案や指導方法について講評を行う。

平成28年度の教職実践演習（臨床心理学）では、『あたたかい言葉かけ』、『相手の気持ちを考えて行動する』、『話す力、聞く力』、『上手な誘い方』、『自分の気持ちをはっきりと伝える』、『気持ちを表す』、『お互いの違いを知る』などが、心理教育のテーマとして取り挙げられており、「実践力」の要素である「自律的活動力」、「人間関係形成力」、「社会参画力」を反映したテーマとなっているといえるだろう。また、「実践力」の定義を下に作成された加藤他（2017）の評価基準では、「模擬授業を通して、児童生徒の主体性を促す工夫を、心理学的観点から考えることができる」、「模擬授業を通して、アイデンティティや価値観に働きかける心理教育を実践することができる」、「模擬授業を通して、児童生徒に適応的行動を指導したり、児童生徒のコミュニケーション・スキルや思いやりに働きかけることができる」、「模擬授業を通して、児童生徒に対してルールやマナーを指導することができる」などの項目が設定されており、これらは、上述の心理教育のテーマとも整合するものとなっている。

例として、『あたたかい言葉かけ』に関する模擬授業の回について紹介する。この回では、発表者は、初等教育実習の経験を下に、(1) クラスの中のグループがある程度形成されており、集団としてのまとまりがみられなくなっていたこと、(2) 運動会を控え、クラス内のトラブルが見られたことを課題として設定し、集団としてのまとまりを高めることを目的にした模擬授業が行われた。模擬授業では、『あたたかい言葉かけ』を学ぶことが指導の狙いとされた。授業の導入部では、あたたかい言葉かけやあたたかい言葉かけをされるとどのような気持ちになるのかについて、対象年齢に合わせて、動物キャラクターを用いた寸劇を用いて教授された。さらに、展開部では、「いいとこさがしカード」を用いて、児童同士であたたかい言葉を付けて、いいところを言い合うというゲームが行われた。ディスカッション及び講評では、発表者が児童生徒に対して指示が伝わっているかを適宜、確認していることが高く評価された。

教職実践演習（臨床心理学）によって期待される成果として、受講生は、指導案の作成や模擬授業を行う中で、学部4年間の教職課程の中で身につけた教師としての資質能力を発揮し、再確認することが挙げられる。また、臨床心理学に関する知識を、児童生徒を対象として見据えてアウトプットすることにより、臨床心理学の学びを自らの教育実践に統合していくことが期待される。特に、心理教育を行う際には、①どのような状況で、なぜ、そのようなスキ

ルが必要であるのかなどを言語で説明すること, ②教師や同級生が実際にスキルを活用している様子をお手本として観察すること, ③ロールプレイを通して, やり方を学ぶこと, ④日常での活用を促すことが重要となる。受講生は, これらの観点を含む多様な視点からの討論や講評を受けて, 自らの指導を客観的に振り返ることにより, 指導力をより確かなものへと変容することができると考えられる。

(田中圭介)

5 おわりに

臨床心理学コースでは, これら上記の教育実践を通して, 学生の「実践力」を養う教育を行っている。学生が臨床心理学教育の「実践力」を身に付けることで, 将来入職したとき, 心の問題や悩みを抱える児童生徒に対して適切な対応をすることができるようになると期待される。教育現場では, 価値観の多様化や貧困問題の拡大などによって, 個人の抱える心の問題が複雑になってきている。柔軟に対応するには, 教員の高い「実践力」が必要であり, 今後ますます重要になってくるであろう。

(近藤 孝司)

引用文献

- 1) 高山巖 (1999). 臨床心理学 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁枡算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典p.892. 有斐閣
- 2) 加藤哲文・五十嵐透子・近藤孝司・田中圭介・宮下敏恵・山本隆一郎 (印刷中). 「教育相談・カウンセリング」教育における「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」の捉え方 上越教育大学研究紀要
- 3) 中央教育審議会 (2006). 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) 平成18年7月
- 4) 南埜猛・岸田恵津・別惣淳二・山中一英・石野秀明・藤原忠雄 (2015). 教職実践演習「模擬授業」の授業実践から考えるカリキュラム改善の提案 兵庫教育大学研究紀要, 47, 49-59.
- 5) 岡林春雄 (1997). 心理教育 金子書房
- 6) 佐藤正二・相川充 (2005). 実践! ソーシャルスキル教育 小学校編—対人関係能力を育てる授業の最前線— 図書文化社

A class example of clinical psychology education to nurture “practical power”.

Takashi KONDO* · Tetsubumi KATO* · Keisuke TANAKA* · Kyuichi MIYAZAKI*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to report what kind of educational practice is being done in “clinical psychology” education to foster “practice power” of “ability to survive the 21st century”. And, for example, we talked about concrete practical example of “The basic seminar for counseling”, “Clinical Psychology”, “Practical Seminar for the Teaching Profession” and “Practical Seminar on Clinical Psychology”.